



Title	L. A. ムラトーリの『イタリア年代記(Annali d' Italia)』に関するノート その2 : 古代および中世
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学学報. 1986, 71(1-3), p. 179-195
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81099
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

L. A. ムラトーリの『イタリア年代記 (Annali d' Italia)』 に関するノート その2 —— 古代および中世 ——

イタリア語科 米 山 喜 晟

Le note sugli “Annali d' Italia” di L. A. Muratori (2)

Yoshiaki Yoneyama

レジュメは掲載済み

(ノート 2の続き)次に歴史に悪名を止めた悪帝を眺めるが、一般的な傾向として、M. は先に善帝について引用したようなくわしい性格描写は行わず、その残酷な行為や不幸な事件そのものを叙述している。しかもその悪事をあまり詳細に記すことを好まない。彼には猟奇趣味がほとんどないといえる。M. には悪人の心理を内面から捉えようとする意図は認められない。だから悪帝の時代は目まぐるしい事件の連続に終始しているという印象が強い。さらに悪事そのものが、皇帝自身によってというよりも、皇帝が趣味や怠惰にふけっている間に、全権をにぎった家来たちによって行われている場合が少くない。M. は原則として、他人まかせの名前だけの皇帝を評価しないようである。つまり皇帝は陣頭に立って指揮すべきだと考えている。また事実ごく少数の例外を除くと、実権を握っている臣下が善政を行った例はない。だから皇帝はあくまで勤勉で良心的に職務に励まねばならない。家来に存分に腕を振わせるという名君像はきわめて稀である。

(6) Tiberio たとえば恐怖政治の元祖のごとき Tiberio も、「要するに Tiberio は最高の君主となり、名誉ある皇帝となるための頭脳をそなえていたが、その結果是最悪だった。というのは彼の悪しき傾向が、そうした意図をはるかに圧倒していたからだ³³⁾」と評されているが、実際には虚栄心の強い母をはじめ、邪悪な家来 Druso や Sejano の苛政の影響や、人気の高すぎる名将 Germanico への嫉妬と恐れ、ローマに帰ると不慮の死をとげるという予言など次元の異なる様々な事情に引き摺り回されたものとして描かれている。しかしその悪名が家来のせいばかりでなかったことも確かだ[「多くの人々は、Tiberio が悪しき官吏たちや Sejano に対する疑い等のくび木から解放されると、今後は善政を布いてくれるものと想像した。だがそれは誤解も甚しいもので、彼は益々邪悪になっていった³⁴⁾」と記されている。すでに若年より残酷な傾向があったことは、「ロードス島に身を潜めていたころ、彼はそのころカルデア人によっていたる所に弘められたこの技術[占星術]

を深く研究した。ロードス島にその先生がやって来る毎に、彼は一人の解放奴隷と共に、彼らを高い断崖の上に案内し、過去のことや将来のことを占わせて試験した。もしうまくあてなかった場合、彼らは誰にも知られることなく、解放奴隷によって海に投げ落された³⁵⁾」という記事からも分る。皇帝となった後、カプリ島の別荘で行った悪事は名高いが、M. は「当時のまともな人々が聞くだけでもぞっとした、ありとあらゆる方法での淫らな行為を、カプリ島の淫売窟で思いついては実行したと記すだけで十分だろう³⁶⁾」として、あまりくわしくは触れていない。

(7) *Commodo* 名君 *Marco Antonio* の子で、*Caligola*, *Nerone*, *Domiziano*, *Elagabalo* と同じく若く帝位につき、余りにも強大な権力で気が変になった暴君の一人。側近政治の害もあるが、本人がやっても善政はありえない。「彼は気まぐれに人を殺させた。出会った際異国の服を着ていたとか、自分のより立派な服を着ているだけで殺させた。ある人が *Suetonio* の書いた『*Caligola* 伝』を読んだと知っただけで、彼を野獣の餌食とした。何故なら彼は *Caligola* と同じ日に生れたからである。こうした彼の残酷ぶりは *Lampridio* が書いているので、私はやめにしておく。人々の笑いをさそうこうした彼の愚行は決して少くない。しかしもし彼が、誰かにからかわれたり笑われたりしたと気付いたら大変だった。相手をすぐ野獣の餌食にしてしまったからだ。こんなに人々から笑われないようにと用心しているくせに、彼は公衆の面前に女装をしたり、棍棒を持った *Ercole* に扮したり、蛇がからみ翼のついた例の杖を持った *Mercurio* の姿をして現われたのだ。だが彼の狂気の極致は、自分がこの世界開闢以来最高の剣闘士であり狩猟家だと信じていたことだ。たしかに歴史家たちも、槍を投げたり矢を射たりして野獣を殺す際の力や巧みさは、すばらしかったことをみとめている。(中略) これだけが唯一の彼の取り柄で、他の点では彼はウサギと全く変らなかった。³⁷⁾」彼はこうした剣技で喝采を博すのが大好きで、100頭のライオンを一度に殺したりした。「これ以上に野蠻で狂った君主が考えられるであろうか。*Dione* は自分も同僚の元老院議員たちと共に、恐怖に襲われたことを白状している。というのはある時 *Commodo* が剣で一羽のスズメの首(あんな物とはいえ)をチョン切ったかと思うと、それを手に取りもう一方の手で剣をにぎって元老院議員たちの方に険しい顔付きでやって来たが、その間一度も口を開かなかった。おそらくそれは彼が元老院議員に対してだって同じことがやれることを、分らせたかったのだろう。³⁸⁾」

次に軍人皇帝の批評に移るが、この後世でも評価が定まらぬ皇帝たちについての記述においてこそ、M. の本領が発揮されているという印象が強い。ただし紙面の制約もあるので、簡略に引用を行なうにとどめたい。

(8) *Vespasiano* M. はこの生れの卑しい軍人上りの皇帝に対してきわめて好意的で、M. の描く皇帝像は *Traiano* などよりもさらに複雑で、魅力的な相貌を示している点が興味深い。「実は当初 *Vespasiano* が帝位に達するだろうと予想した人は一人もいなかったし、本人も望んではいなかった。というのは、彼は *Rieti* のいやしい生れで、資金も不足していたからだ。また彼の私生活の下品さについて多くの人が語っており、*Tacito* などは、彼が人民の憎悪と軽蔑的になっていたと証言しているほどである。しかし事実はやがて、全くその反対だったことを我々に示してくれた。とに

角神は彼に、ローマを怪物たちから解放し、また誕生したキリスト教をあくことなく迫害し続けたユダヤ人の思い上りを罰するという運命を与えたのだった。それに彼は多くの賞讃すべき特性を備えていた。つまり派手さがなく、食事は控え目で、万人とりわけ兵士たちに愛情深かったからである。兵士たちの方でも、軍規はきびしかったにもかかわらず、彼を少なからず愛していた。彼自身注意深くて慎重な良い兵士だったし、さらにすぐれた隊長だった。とりわけ正義を愛する人と考えられていて、当時年令は60才だった。³⁹⁾「Vespasiano の生活には派手な所がなかった。誰もが彼を主君として敬ったが、彼は逆にすべての人に対して、同じ一市民として、あるいは一私人として出会うことを好んだ。宮殿内では減多に住まず、むしろ居心地の良い Sallustio の菜園内で住むことを好んだ。そこで彼は元老院議員のみならず、他のあらゆる身分の人と喜んで面談した。いつも早朝夜明け前に目を覚まし、ベッドの中で寝たまま自分あてに出された手紙やメモを読み、また服を着用する時召使や友人たちを迎え入れて、彼らと今起っている出来事について話し合った。その仲間の一人に大 Plinio がいた。⁴⁰⁾「彼は冗談をいうことができたし、上品に皮肉なこともできた。他人が自分にそうしても、気を悪くしなかった。彼はとりわけ賢い人々とつき合うのを好み、彼らを自由に出入りさせた。〈ああ私が賢人に命令し、賢人も私に命令できたなら良いのに〉と言ったことがある。当時彼に対する落首、諷刺がなくもなかったが、たとえそれを知らされても少しも腹を立てず、しかしいくら諷刺されても公共に有益だと思われたことは実行し続けた。(中略)真実が語られた時、彼は類稀な忍耐力でこれに耐えた。そして Cicerone が Giulio Cesare について賞讃した、侮辱を忘れるという特権を享受した。⁴¹⁾「彼がリエーティ市の創建者たちの子孫で、Ercole の子孫だと示した、阿諛に満ちた系図を作った者を、彼は笑った。むしろ夏になると時々リエーティ市の郊外にある、彼が生れた家へ何日かすごしに出かけた。また自分が昔何者であったかを忘れないために、その場所に変更を加えることを決して望まなかった。⁴²⁾「どうやら彼は決してお金に満足しなかったようだ。お金を入手するために Galba 帝によって廃されていた租税と関税を復活させたり、さらに新しい税金や負担を追加した。属州の貢納金も増額され、いくつかの属州では二倍になった。⁴³⁾「ある都市の使者が彼の名誉のため2万5千ドラクメもかけて等身大の像を建てようと許可を求めた時、彼は開いた掌を差し出して、〈ここに君たちが像を建てることのできる台座があるよ〉と言った。⁴⁴⁾「しかしこうした悪徳の醜い姿も、Suetonio や Dione が見た通り、V. が財産を奪うために人を殺したこともなく、また不正な仕方他人の物を占有したこともなかったと知ると、かなりましなものになる。⁴⁵⁾「この点に関して彼の汚点を完全にぬぐい消すことはできないが、彼がお金を上手に使った点を考慮するなら、彼のために立派に弁護し、お金を集めるのに用いた汚いやり方にもいくらか容赦が与えられるだろう。もし大 Plinio の伝えることが誤っていなければ、当時ローマの城壁は 13 miglia 200 passi に達したとされ、新しい領域が広大な土地を取りこんだのである。⁴⁶⁾」

(9) Diocleziano と Massimiano 複数皇帝制度を正式に確立させた軍人皇帝 Diocleziano の肖像も、我々が通常軍人皇帝ということばかりから得る印象とは著しく異っている。彼は一介の武弁どころではなくて、抜け目のない政治家であり、すぐれた組織者でもあったことが分る。帝政末期には、

軍隊のみがすぐれた政治家を育てる学校だったという印象が否めない。もしも天性の政治家が自分の運命を実現しようとすれば、軍隊に入る他なかったともいえるだろう。Diocleziano はとても下層の出とも、解放奴隷ともいわれるが、父が書記又は公証人だったとの説もある。とにかく「軍歴を進んでメシア軍司令官に昇進し⁴⁷⁾」、混乱に乗じて皇帝となった。「否定しがたいことは彼の内で様々の長所が結合しあっていたということで、特に驚くべきものは彼における頭脳の明敏さと才気煥発ぶりだった。この点において並ぶものはいない。この資質を用いて彼は容易に他人の心中をのぞきこみ、その意図を見抜いてだまされなかった。またその頭脳のおかげで必要や危険に際しても、あらゆることを予見かつ配慮し、必要に応じてごまかしたり隠したりすることによって、すぐ応急処置や抜け道を発見できた。彼の生来の気質は実は猛烈ではげしいものだったが、それを抑えることや自らを支配することに慣れていて、また残酷な所業に走った際もそれをおおい隠し、さもなくば憎しみを助言者や大臣に転嫁させる術を心得ていた。お金を貯えてけちる傾向が強くて、金のためにはあらゆる不正を犯したものの、贅沢にも目がなく、特に服装の華美を好み、それを黄金や宝石で飾り、その点で前任者たちの誰をも凌駕した。だがこれとて彼が傲慢の余り行った気ばらしのほんの一端にすぎず、時が経つにつれて、Caligola や Domiziano を真似て自分を神とよばせ、神として礼拝させた。⁴⁸⁾」「我々は彼の軍事的事業を見るはずだが、Lattanzio の証言によると、彼は天性臆病者で、危険にあうとふるえたという。だが長期にわたる彼の統治は非常にしばしば嵐に見舞われたけれども、その長い期間そのものが、Diocleziano は大変すぐれた頭脳の人で、広大な帝国を治めるのにきわめて有能で、兵士たちや有力者を統制しえていた(中略)ことを信じるに十分な根拠である。⁴⁹⁾」「広大な帝国の重荷を支えるために一人を選んでそれが Massimiano だった。⁵⁰⁾」「彼の両親は他人の日傭いとして働いてはパンを稼いでいたが、軍務が M. を最も低い境遇から次々と昇進させてついに最高位に導いた。彼は常に D. の真の友で、そのあらゆる秘密に関与していた。(中略) Diocleziano は自分が天性臆病であり、非常の際自分に代って対決してくれる人が必要だと感じていたので、友人 Massimiano を右腕に選び、いかなる血縁関係もなかったようだが、玉座の同僚に指名した。⁵¹⁾」「この時代に、血のつながりもなく、気質もお互いにこんなに異っているのに、この先ずっと協力し合い、二人の仲の良い兄弟のように治めるのを見るのは驚くべきことだ。M. は顔にも習慣にも、生れに由来する野卑さを備えていて、その性質は猛々しく乱暴で、洗練ややさしさを欠いていた。その画像にも図々しさが感じられる。D. はその反対に、最高に狡猾だったので、愛想の良さややさしさを装って、時折 M. の武骨さを嘆きさえした。しかし自分の意志を実行するために彼の悍猛さや野蛮さを利用することを知っていた。たまたま何か苛酷で人の憎しみを招く決定を下す破目になると、彼はその任務と名誉を M. におしつけ、相手はむしろ進んでそれに従った。⁵²⁾」

(10) Costantino 残念ながらローマ皇帝中最長の治世を誇り、キリスト教会にとっては最大の功績者の一人である Costantino について、その生涯を辿る紙幅はないが、皇帝 Galerio に圧迫されて耐え忍ぶ青年期の姿は真の英雄の名にふさわしく、見事に描かれている。しかし M. はその統治が必

ずしも栄光に充ちたものではなかったことを見のがさない。M. は後代のC. を神格化するような見方に対して、次のように水をさす。「だが読者に知っていただきたいことは、この名誉ある皇帝の功績はすばらしいものではあるが、しかしもしもあらゆるキリスト教的美德の全体を示し、悪徳や重大な欠点を完全に免れている存在を意味する、真の意味での聖人という称号を用いようとするならば、Costantino がそういう立派な称号を帯びるには程遠かったことである。⁵³⁾」M. は名誉心が強すぎたとか、華美を好んだとか、晩年快樂にふけたという多くは異教の歴史家から伝えられたC. の欠点をいくらか弁護も混えて紹介した後、その長い治世に次のような評価があることをも伝える。すなわち Vittore が記した、「彼は最初の10年間は良き君主として善政を布いたが、続く10年間は泥棒として登場し [税が高かったので]、最後の10年間は文なしの被後見人のようだった⁵⁴⁾」という説である。もっとも M. は全面的にこの説に従うわけではなく、むしろ Eusebio らの税を軽くした説の方に傾いている。「むしろさらに正当にこの君主において非難されるべきは、彼の過度の善良さ、愛情深さ、寛大さである⁵⁵⁾」として、皇帝が甘いため悪人がつけ上り、民衆が苦しんだことを記す。さらに家来たちが邪悪で、特に取り巻きのドナティスト異端派に惑わされた罪を指摘して、中世の教会が普及させようとした Costantino 像の打破に努めている。

以上の諸評価により、M. がいかなる皇帝を理想視したか、ある程度推察しうる筈である。M. はキリスト教迫害者の Trajano に讃辞を惜しまず、教会の功績者 Costantino の治世を疑問視する。華麗で総明な Adriano よりも、地味で謙虚な Antonio Pio を好む。

問題はこうした M. の好み、ローマの民衆や兵士たちの好みと必ずしも一致していないということである。勿論かなり重なり合っているものの、ローマ民衆は皇帝の贈り物や見世物を殊の他好み、幼い暴君たちは彼らによって作られたという一面がある。イタリアの民衆は、それにふさわしい君主を持っていたといえなくもないようだ。そうした側面をも含めて従来イタリア人が好んだ君主像は、必ずしもこれまでに明らかに捉えられているとはいえないように思われる。

〔注〕（ノート2の続きの部分）

33) id., Vol. I, p. 72.

34) id., p. 139.

35) id., pp. 162-3.

36) id., p. 143.

37) id., Vol. III, pp. 260-1.

38) id., p. 285.

39) id., Vol. II, p. 97.

40) id., p. 125.

41) id., pp. 126-7.

42) id., p. 132.

43) id., p. 140.

44) id.

45) id., p. 142.

- 46) id., p. 144.
- 47) id., Vol. IV, p. 350.
- 48) id., pp. 351-2.
- 49) id., p. 352.
- 50) id.
- 51) id., p. 353.
- 52) id., p. 355.
- 53) id., Vol. V, p. 201.
- 54) id., p. 203.
- 55) id.

(ノート 2 完)

ノート 3 東ゴート族支配下のイタリアに関するムラトーリの叙述について

Nota III Dell'età del governo dei goti degli "Annali d' Italia"

Cap. I Delle notizie interessanti di quest'età

Degli ostrogoti, la loro comparsa tarda nella storia italiana, il loro luogo d'origine, il loro modo d'educazione, la protesta contro la regina Amalasunta, l'errore nell' educazione del re Atalario. Sull' ambizione d' Imperatore Giustiziano. Della debolezza della flotta gotica. Dell' instabilità dell' autorità del papa. Delle regole di San Benedetto e del suo monastero. Dell' introduzione della seta in Europa.

Cap. II Delle vite e dei giudizi di M. sui principi di quest'età

Su Odoacre, Teoderico, Clodoveo, Giustino, Giustiziano, Totila.

第一章 東ゴート族支配の時代に関する興味ある記述

本ノートでは、まず東ゴート族支配の時代に関して Muratori (以下 M. と略)が行ったいくつかの注目すべき叙述を記録すると共に、次節において、同時代の君主をいかに表現し評価しているかを眺めておく。たとえば Bertelli の著書では、この時代も、前代の帝政時代同様、特に重視されている訳ではなく、約 2 ページで片付けられていて、M. が Giustiziano 帝の二大將軍 Belisario と Narsete に対して、前者は皇后 Teodora の言いなりになったこと、後者は偉大な勇気と行動の人であったが、やはり宦官の性格があったことを理由に不満を示している事実と、Baronio 枢機卿が賞讃する、東ゴート族に対する叛乱を指導し、ミラノに大被害を及ぼした大司教 Dazio に関して、「むしろ私は、そのはげしい熱情が市とその民衆の悲しむべき破滅をひき起した Dazio の事件に関

しては、(その評価に) より大きな慎重さが求められても良いだろう、と言いたい²⁾」と記して Baronio との違いを表明していることを指摘しているにすぎない。しかし Bertelli は、次節で見る通り(第二章注49参照)、M. が東ゴート族に対して好意的であったことを明確に認めている。また Ricciardi 社刊の縮刷版では、8 項目14ページ³⁾ (全480ページ中の2.92%) を占め、その約64年間の治世に比して、やや少ない紙幅しか与えられていないが、これも原作中での比率が小さいためと思われる。それは長期にわたった Teoderico の治世が安定していたことの現われで、東ゴート族にとって決して不名誉なことではない。

この『年代記』における東ゴート族のイタリア登場は他のゲルマン民族やフン族に比してかなり遅く、西ゴート王 Alarico が有名なローマ劫掠(410年)を行って半世紀余りたった473年に、Videmire の軍がイタリアに来たとされる時代から始まるらしい。同年イタリア王とは別人の Teoderico が皇帝 Leone に定住地を求めたとされ、そこに「我々が Ostrogoti と呼び始めるであろう(未来形利用)あのゴート人⁴⁾」と特記されている点から考えて、ようやく東ゴート族が独自の集団と認められたことが分る。475年父 Teodemiro の後をついで東ゴート族の王となった Teoderico は、一度は東ローマ帝国内に落ちつくが、やがて皇帝 Zenone の許可を得て、Odoacre の支配するイタリアに侵入。M. はその移動を「ゴート人たちは、車上に子供、女、老人、持てる限りの動産、さらには小麦やそれを手で挽く臼までもつみこんだ。年の暮れであったが、冬も雪も氷も彼らの旅を引留めることはできなかった。それほど彼らのイタリアへ行きたいという望みは強かったのだ⁵⁾」と記す。なおこの東西ゴート族の出身地について、「Nicezio が Alboino 王(ロンゴバルド族の初代イタリア王)の臣下である人々を Longobardi とは呼ばず Goti と呼んでいる点は注意すべきである。信じられる所では、それはロンゴバルド族がゴート族が出て来たのと同じスカンディナヴィアの出身だと噂されていたためで、したがって名前が異っていても同一の民族だという評判を得ていたからである。同じ現象は今日は無数の種族に分れて、我々がタールタロ人と呼んでいるフン族にも生じたのである⁶⁾」とされ、ロンゴバルド族と同じくスカンディナヴィア半島だとされている。後に見る通り Teoderico は、さして失政のなかった Odoacre を欺し討ちにして王権を奪い(493年)、フランク王の武力をもうまく牽制して平和を保ち、524年精神状態が悪化して Boezio らを処罰するころまで善政を布くが、Giustino 帝(518年即位)とその甥の Giustiziano の親カトリック政策に苛立ち晩年は暴君化して死んだ(526年)。

Teoderico の没後、その娘 Amalasunta が、息子の幼い王 Atalarico の後見人となって、やはり善政を布いた。彼女は「すばらしい判断力に恵まれ、正義を熱望し、むしろ男らしい精神を備えていた⁷⁾」ため、Simmaco や Boezio の財産を返還するなどの配慮で、人民の心をつかんだが、幼王 Atalarico の教育に関して、ゴート族との葛藤が生じる。「息子は彼女に養育されてローマ風の教育を受け、自由学芸を学ぶため学校にも通わされた。彼女は東ゴート族の三人の最長老たちに息子の代理をさせていたが、たまたま息子が誤ちを犯したところを寝室で見出して平手打ちを食わせたところ、幼王は泣きながら逃げ去った。長老たちはこれを知ると、大変憤慨して、Amalasunta をこき

おろし、たぶん彼女が息子を心労で殺し、その後再婚したがっているとか、絶対権力を望んでいるかのように噂した。そこである日ゴート族の最上席をしめる人々が彼女に面会にやって来て、彼らは彼女の息子の教育方法を好まないと述べた。すなわち文字を学ぶことは卑怯と臆病をよび醒まし、武芸の敵だというわけだ。彼らの王は学者である必要はないが、戦士であり武芸に通じていなければならないのだ。Teoderico 王にしたって自分の名前一つ読み書きできなかったが、多くの民族を震え上がらせ、無数の征服を行った。彼もまた鞭打ちをこわがる癖がついている者が、大胆に棒や槍を扱える筈はないといって、ゴート族の者に学校へ行くことを許さなかった。だから彼らは王子のために学者を備うことを望まぬと忠告した挙句、その代り彼女は彼と同年の若者を選ぶよう、彼らが王子と仲間になり、王子は民族の習慣に従って統治の方法の勉強に励むべきだとすすめた。Amalasunta はそうした要求を好まなかったが、新事態が生じるのをおそれ、忠言を感謝するふりをして、要求を実行した。だがそのため後に Atalarico の破滅が生じた。⁸⁾ その破滅とは次のごときものである。「そのころ (534年) イタリアでも事態が一変した。というのは Atalarico がこの世を去ったからだ。かつてその母 Amalasunta がゴート人たちの望むように育てることを強制されてから、彼は好色や暴飲暴食やその他もろもろの悪習のとりことなり、そのため長患いにかかって結局墓場に行くことになった。⁹⁾ この王の死によって、Amalasunta は支配の根拠を失い、いどこ Teodato に欺かれて追放され殺害され、その事実が Giustiziano の軍隊のイタリア侵入の口実となる。Giustiziano は Teodato の Amalasunta 殺害を怒りながらも、「反面内心で、運命が彼にゴート族に戦いをしかけるこんなもともらしい口実を、すなわち彼がずっと待ちこがれていた、イタリアを取り戻すチャンスを与えてくれたことを喜んだ¹⁰⁾」という Procopio のコメントを M. は忘れずに付け加えている。要するにゴート族の間には、ローマ式教育に対する根強い反感、不信があったこと、しかしゴート式の教育も、イタリアの風土の中では王子を甘やかすにすぎなかったことが、以上の記録によって推察できる。その他ゴート族に関しては、当然のことながら海戦に弱く、「海戦に通じたギリシア人の敵ではなく¹¹⁾」、無理に Sinigaglia で対抗して大敗を喫したという記録も見られる。その他の王の統治に関しては次節に回す。

まだ当時は法王の権威が安定せず、525年コンスタンチノーブルに招かれた法王 Giovanni が大主教よりも上席について、キリスト教会中第一位にあることが認められたという記述があり¹²⁾、それに類した教会関係の記事が、むしろかなり断片的に取上げられている。それらの内で、重要と思われるものの一つが、San Benedettoに関するものである。だがそれも後代のイタリア史や中世史の記述に較べるとはるかに簡潔である¹³⁾。「ほぼこの時代 (530年) その聖徳と奇跡によって Benedetto が活躍したが、彼はイタリアにおける修道運動の再建者であり、布教者であった。その運動は、徐々に全西方世界に拡がった。彼以前にも、この地方には他の修道院や修道士が見られたが、彼によって建設されたもののようにはよく統制されていなかった。彼はしばらく暮した Subiaco から Monte Cassinoに移り、そこで有名なその修道院を建設し、その後そこから他のあらゆる修道院が規則を学び、修道の道に進む者は男女を問わず、この聖人の修道院長のすばらしい分別と判断によ

って規定された規則に服従し、また同じ規則にのっとって修道院が建設された。¹⁴⁾ 544年の項にこの聖人の死が記されてほぼ同様の記述が繰返され、さらに559年の項で、ローマの滅亡に関する彼の予言が語られている。

やや毛色の変った記述としては、551年の項に、ヨーロッパに絹の生産が伝えられた経緯が記されていることが注目されるだろう。「大体このころ、なお皇帝 Giustiziano とペルシア人の戦争が続いていた時、皇帝の心に今後人民にペルシア人から絹を買うことを禁じようという考えが浮んだ。というのは当時この商品が高値に達していて、帝国から巨額の黄金を持出す結果となり、ペルシア人にもうけさせていたためである。彼らはその輸入を独占していて、過度の暴利をむさぼりつつそれをヨーロッパ人に売り渡していたのだった。この勅令が出ると、インド帰りの何人かの修道士がヨーロッパに絹の生産を採り入れる考えを示し、その方法を記して皇帝に提出した。皇帝は大変驚き、多額の褒美を約束して激励し計画を実行させた。そこで修道士たちはインドに再び出かけ、そこから多量のカイコの卵をコンスタンチノーブルに持ち帰り、それが孵化すると、桑の葉で育てられ、絹を作り始めた。そこで東ローマ帝国に技術もしくは生産が導入され、やがて普及して、今日見られるまでに至った。¹⁵⁾」他にも興味深い記述や、数々の重要事件が見出されるが、一応この辺で打切らざるをえない。

第二章 東ゴート族支配の時代の主要な君主に対するムラトーリの批評

(1) Odoacre 「Odoacre に関しても、他のどんな出来事に関しても、古代史家の間でどんな記録も残っていないことから見ると、この当時のイタリアでは、偉大な平和が享受されていたことが推測できる。事実 O. は、生れこそ蛮族ではあったが、イタリアで教育を受けた。人民に苛酷な、あるいは邪悪な政治を行ったとは伝えられていない。さらにアリウス派ではあったが、カトリック教会の偏見を招くような、いかなる新制度も導入してはおらず、この人に関して、法王の側からも、著者の側からも、いかなる非難も記されていない。ローマ人やギリシャ人は、自分たちの民族に属していない人々を蛮族と呼んでいた。しかしローマ人やギリシア人自身よりも、善良で賢明で清潔な蛮族も存在していたのだ。¹⁾」

(2) Teoderico 「(コンスタンチノーブルの宮廷より父の許に戻った) Teoderico は18才だったが、すっかり戦争に夢中になっていて、やがて間もなく父の了解も得ずに、6000人の兵士の一団を率いてドナウ川をわたり(中略、戦勝で)思い上っていた Sarmati 族の王 Babai を不意打ちして殺し、莫大な賠償金を持って帰国した。²⁾」父の死後王位をつぎ、東ローマ帝国領をあらし、名將 Sabiniano に食いとめられ、東ローマと妥協、だが再度皇帝 Zenone と紛争が生じた。皇帝はTを養子としてみとめる。帝の誘導か、T. 本人の意志かで Odoacre 攻めを計画。東ゴート族を率いてイタリアに侵入。Odoacre を何度も破り、ラヴェンナに追いつめる。3年間の攻城で市民が餓える。Odoacre 和平を打診、「たしかに T. は求められたものを気前良く譲れた筈だ。何故なら彼はすでに約束を破ってやろうという腹をきめていたからだ。事実彼は数日間甘いもてなしで Odoacre の機嫌

を取っていたが、ある日 Lauro 又は Laureto という宮殿へ、廷臣達との食事に O. を招いた後、その生命を奪わせた。Anonimo Valensiano のことばによると、T. 自身その手で O. を殺したという。³⁾ こうして戦争マニアとして登場し、違約によって支配権をにぎった T. が、意外と善政を布く。

「T. 王は、全イタリアを自分の支配下に置いた後も、皇帝の称号には目もくれず、蛮族によって君主の意味で用いられたと Procopio がいう、王の称号を名乗った。しかし賢明な政治家として、ローマの皇帝および国家のあらゆる行政官を重用しただけではなく、自らローマ風の服装をし始め、ゴート人たちにも同じことをするようにすすめた。そのことはイタリア国民 (nazione italiana) に対する愛と尊敬のしるしとして少なからず人々を喜ばせた。その後この幸福な空気の中で、彼は過去幾多の革命の内に惨状に陥っていたイタリアを、正しい秩序に戻すため全力をそそいだ。⁴⁾ イタリア人の捕虜の買い戻しなどに尽力。「真先に記憶されるべきは、T. が生れこそ蛮族だったけれども、コンスタンチノーブルの皇帝の宮廷で育った上に偉大な人物だったので、まず善政、さらに清潔さ、寛大さ、自分は名前すら書けないのに学問や学者に抱いている敬意などのような、臣下から愛され尊敬されるのに役立つことは、何一つおろそかにしなかったことだ。⁵⁾」「この王は公式にはアリウス派で、その東ゴート族も (中略) アリウス派であったけれども、賢明で抜目のない君主らしく、決してカトリック教徒に不安を抱かせることなく、カトリック教会の邪魔をするような振舞いは何一つしなかった。むしろ多くの場合、カトリック教会そのものに好意的な態度を示した。⁶⁾」その実例としてカトリックからアリウス派に改宗した大臣の処刑。「この年 (504年)、Cassiodorio の証言によると、T. 王は全部自分の費用で、完全に壊れていた (ラヴェンナの) 水道を再建させた。⁷⁾」同年 Bulgari 族を討ち、領地拡大。T. 王パンノニアに使者送り、決闘や仲間争いを禁止。Cassiodorio に書かせた手紙に、「くもし自分の主張を述べるために、武器にたより決闘で決める必要があるとすれば、神から人間に与えられた舌は何の役に立つのか⁸⁾」という一節があり、「これらの蛮族の方が、後代の剣を振り回す喧嘩好きな連中よりずっと知恵があった。⁹⁾」507年フランク族の Clodoveo 王が西ゴート族 Alarico 王を討ち、領土を奪う。「T. 王は、種族を同じくする西ゴートの敗北を悲しまずにはいられなかったが、さらにフランク族の武力のこれほどの成功は、自分の王国にとって危険だと考え、Ibba 伯もしくは他の人々カ Ebbane 伯と呼んでいる自分の將軍の指揮で有力な軍隊をガリアに派遣した。(中略、王自ら出陣したという説(Procopio, Cipriano)も併記。東西両ゴート軍によるアルルの防衛。)ある日フランク族が Rodano 河に設けられた橋を占有したいと望んだ (中略)。防衛に当たったのは、生れはゴート人でかの Alarico 王の親戚の Tulo で、彼は部下と共に頑強に防いだので、侵略者は後退せざるをえなかった。だが Tulo 自身もこの戦いで負傷。padre Danielo はこの事実を見事な雄弁で、まるで見て来たように描いている。それによると、小ぜり合いが少しずつ拡大して、ついに対峙する両軍の主力が丸ごとそれに巻きこまれたとされる。ついにフランク族は、東ゴート軍のみならず、同時に市から出撃した西ゴートの守備軍から激しい反撃を食い、総崩れとなって完全な敗北を喫した。歴史家 Giordano を信じるならば、捕虜を除く戦死者の遺体が戦場に 3

万体も残された。捕虜の数も莫大で、聖 Cesario は彼らに慈悲を垂れた。¹⁰⁾ こうしてフランク族を押し戻し、西ゴート王 Gesalico を追放した後の T. 王の領土は、Italia, Sicilia, Dalmazia, Norico, Pannonia 南部, due Rezie, Svevia に新しく加えた Provenza と Spagna に及んでいて、「他人に対してきわめて好意的で、公正な彼の統治下で、少なからず昔の栄光を取り戻した。¹¹⁾」512 年の紛争の火元であったフランク王 Clodoveo 没後、T. 王は平和政策を堅持した。「イタリア王 T. は戦争よりも平和を愛し、自分の征服地をふやすことよりも保つことを好んだので、(Clodoveo に奪われた領地を奪回しようとするゴート人の) その戦争をやめさせねばならなかった。つまり我々は彼がその後フランク族に平和を享受させているのを見出す。逆にフランク族の方でも、彼の存命中には、その勢力と剛勇ぶりを十分承知していたので、あえて彼の国を乱そうとはしなかった。(中略、Borgogni 族も同じ)要するに、この君主に対する敬意と、彼を敵に回すことの恐怖とが、彼が生きて統治していた間は蛮族のあらゆる王を抑制していたのだが、その死後一挙に解き放たれたのだ。¹²⁾」平和な治世中にラヴェンナ、パヴィーア等の建築に着手、城壁等も再建された。「彼はそれと同じく市場や商業の繁栄に意を用い、外国の商人たちが喜んでイタリアへ取引のためやって来た。彼の統治の規律正しさと厳格さとは、大変行届いていたので、田舎でも黄金や銀を市の城壁内にいるのと同じ安全さで所持しえた。(中略) 当時全イタリアで、市民が誰でも昼夜を問わず好きな時に出入りして、自分たちの利害に専念できるよう、市の城門は決して閉じられないのが普通で、犯罪者の心配などなかったのだ。¹³⁾」小麦やブドウ酒も豊富で安かった。T. 王自身は読み書きできず、自分の名の最初の 5 文字を透かし彫りした黄金の板を紙の上に置き、ペンでなぞって署名をしていた¹⁴⁾。こうした善政が、524 年に一挙に恐怖政治に転化する。「この年 T. 王の精神は変調をきたし始めた。(中略) この君主は完全に態度を改め、彼の生涯の最後の日々の評判を落とし、その名を当時のみならず死後もイタリアでいまわしいものにした行動に移った。¹⁵⁾」そのきっかけは、Giustino 帝が東ローマ帝国で行ったアリウス派の断圧で、自族がアリウス派に属している T. 王はいら立ち、「さらに、彼がこの理由や、その他の事件によって、あたかもローマ市民たちがアリウス派の君主を嫌い、自由を希求していて、コンスタンチノーブルの宮廷と通じているかのごとき疑惑を抱いて、ローマ市民の忠誠を疑い始めた¹⁶⁾」からで、やがて Boezio や Simmaco らローマきっての知識人であり、指導者でもある人々が処刑される。法王 Giovanni にも弾圧はおよび、東ローマ帝国に使した時に名誉を分かちすぎたという理由で投獄され獄死した。さらにカトリック教会弾圧の準備中、526 年 8 月 30 日に、3 日間続いた激しい下痢の後に没した。「Procopio が伝えているところでは、彼の食卓に異常な大きさの魚が運ばれた時、その頭が殺された Simmaco の頭のように見えて、それが歯をくいしばり、怨めしそうな目で彼をにらんだといううわさが流れた、ということである。この幻覚の直後熱に襲われて……¹⁷⁾」この王は Simmaco や Boezio を十分審査せずに処刑したことを悔いながら没した。

(3) Clodoveo 「やがてガリアやゲルマニアで行った様々な征服によって、フランク王 Clodoveo の力は強まった。このころ彼はアラマンニ族と危険な戦争をしていて、とても敬虔な妻

Clotilde 王妃の忠告によってキリスト教徒の神に助けを求めたところ、ケルンの区域で目ざましい勝利が得られ、相手の王は戦死して領土を獲得した。(中略) こんな幸運な勝利を得た上に、カトリック教徒の王妃 Clotilde にすすめられたので、彼はキリスト教信仰を抱くことになり、そこで主の生誕の日に、ランス司教聖 Remigio の手から神聖な洗礼を受けた。彼の手本が何千というフランク人に真似をさせた。それから先ますます多くの人が改宗したので、あまり経たぬ内に、フランク族という高貴な種族は全員キリスト教を奉じた。¹⁸⁾ この王は一そう領土欲に燃えて、西ゴート族の領地に攻め入り、Vouglèの戦いで西ゴート王 Alarico もろともこの民族を倒した。「この当時 Clodoveo 王は、信仰を抱いてはいたが、イエス・キリストの掟をまだ十分学んでいなかったに違いない。道理とか正義などを必ずしも考慮せずに(中略)、可能なかぎり、あらゆる手段で自分の王国を拡大しようと、かつてなく焦っていて……¹⁹⁾」、当時何人も王の下に分裂していたフランク族の領地を一本化するため、次々と親戚でもある他の王を殺したり、出家させていく。「これらおよびその他の王たち、つまりフランクの小領主たちは、すべて彼の親戚だったのに、Clodoveo が殺してしまった。彼らの王国と宝物の所有者になりおおせた時、一度次のような冗談をもらしたことがあった。くわしは不運な男だのう。まるで巡礼のように、他人の中に取り残されておるわ。もう何か不幸があってもわしを助けてくれる親戚は一人も残っておらぬ。」²⁰⁾ 511年11月27日、パリで没。行年45才、王位にあること30年、最初のカトリック王として教会史に名高く、また偉大な征服者、今も栄えるフランス王権の創設者として歴史に残る。「しかしそのすばらしい素質を、より少ない野心と結びつけ、どんなに悪いことや残酷なことをしてでも、領土をふやしてやろうという焦慮をもう少し抑制していれば、より偉大で純粋な栄光に達していただろう²¹⁾」と M. は惜しむ。

(4) Giustino 暴君の前帝 Anastasio がこの皇帝と甥とを殺そうとしたが、夢の中でこわい男に制止されて実行できなかったという伝説²²⁾がある。「実際、彼 (Anastasio 帝) の死後、元老院の選挙で、皇帝の権威は Giustino に委ねられた。彼は Procopio の証言によると、Ilirico と Tracia の間にある Bederiana に生れた。だからある著者からはトラキア人、他の著者からはイリリコ人とよばれた。生れはとても下層の出だが、一兵卒から出世の階段を登り始め、何段階も昇進して、ついに元老院議員となり、近衛長官になった。Evagrio は、詐欺によって昇進し、金銭で買収して、近衛兵たちが彼を皇帝と宣言するよう画策したと記している。Marcellino 伯は、彼が元老院で選出されたと述べている。(中略) 確実なことは、Giustino の選出において、暴動も暴力も関与していないことである。(中略。その甥 Giustiziano のことを常に悪く書いた Procopio によると) Giustino が帝位についた時、すでに老衰の年に達していて、習慣は粗野で、愚鈍で、おまけに (これはローマ帝政を通じてそれ以前には決して生じなかったことだが) 文字を知らず、自分の名前を書くことすらできなかった。しかしながら、彼の敬虔さは常に偉大で、その習慣は立派に規則づけられており、それ故カトリック教の幸いのために神が彼を帝位につけ給うたのは正当だった。²³⁾ 妻は蛮族出身の女奴隷で彼の妾だったが、皇后となった。「この新しい皇帝の最初の活動は、Anastasio 帝の残酷で邪悪な行為に協力して、マニ教徒の味方をし、とりわけ多くのカトリック教徒の殺害と追放と

によって、無数の悪行を犯してきた不正な宦官や大臣たちを、宮殿から一掃したことである。²⁴⁾同時に追放されていた司教たちを呼び戻し、また Vitaliano や Proclo 等の人材を登用して帝国を再建した。Proclo は正義の人で贈り物を許さなかった。また勅令によって、カトリック擁護と異端制裁を宣言した。ただし人気の高すぎた Vitaliano は、やがて失脚しており、M. はその主謀者を皇帝とする説と、甥とする説とを併記する。しかしこの皇帝は治世10年目の半ばに、足の腫瘍が悪化、甥の Giustiziano を同僚皇帝に推して、4ヶ月目に没した。M. は、「その穏健さ (moderazione) と、カトリックの宗教への好意的情熱のために、もっと長い生涯がふさわしい君主 ²⁵⁾」と評価している。なおこの皇帝の就任直後は、それまで Anastasio 帝時代に極度に悪化していた Teoderico 王との関係が、一時期修復されているが、やがてアリウス派の弾圧によって、一そう深刻な状態に悪化してしまう。

(5) Giustiziano この年代記中、とりわけ人物評価が我々の世界史的知識と異なる皇帝の一人である。Vitaliano 処刑に関して、M. は「この著名な人物の失脚の原因は Evagrio によって Giustino 帝の腹黒い政策によるものとされた。つまり皇帝は、彼が大変評判の高い人物であるため、前任者に対するのと同じことを企てるのを怖れて、その生命を奪うため多くの名誉で釣ったのだ ²⁶⁾」という説も一応紹介するが、むしろ「Giustino の甥の Giustiziano が、過去の反乱を免責することを約束し、友好を誓い、兄弟と見なすといって Vitaliano を宮廷に招きよせ、その後おじの皇帝に対する反逆の容疑をでっち上げて殺させた ²⁷⁾」とする Procopio の説の方を重視する。「それは Giustino が彼によせている過度の信用が気に入らず、また帝位の継承に関して彼が反対者になったり、競争者になることを恐れたため ²⁸⁾」で、「いずれにせよ、Giustino はこの殺害に関していかなる抗議も憤慨も示さなかった。それは甥が関係していたからか、あるいは彼自身も事件の共犯者だったためだろう。その後 Giustiziano は、権威や勢力を大幅に高めた。²⁹⁾」さらに、Teoderico の精神を悪化させたアリウス派弾圧に関しても、Giustiziano によるところが大きいようである。「おそらく Giustiziano も、当時は皇帝ではなかったものの、帝国の政務を担当しており、すでに壮大な考えを抱いていたので、帝国領の最美の部分を持している人を非難した何らかのことばをもらっていて、それが Teoderico 王の耳に入り、その悪感情と疑惑とを心中でますます強めていたようだ。³⁰⁾」いよいよおじの病気で同僚皇帝に推された時も、元老院は彼の悪徳を知っているので、「不承不承、単に恐怖から ³¹⁾」同意したとされる。彼はおじとは違って、学問があり「時には必要以上に ³²⁾」あった。円形劇場の野獣闘の監督の娘で、道化師の間で育ち、Giustiziano が妾にしていた Teodora を皇后にしようとしたが、母や Giustino の妃の反対に会い、彼女らの死後皇后とする³³⁾。この皇后が「多くの不正の道具であり、ふいごであり、また東方におけるカトリック教の鞭だった ³⁴⁾」ことで夫の評判を傷つけた。しかし治世の初めには、カトリック教を支持し異端派を禁じる法を出す。また「週二日は断食し、粗食を摂り、水を飲み、ほとんど眠らず、昼間はずっと、また夜間の一部も公務と皇位に固有の仕事に精励し、これほど活動的で精勤な皇帝なら、先に見るような多くの事業を立派に成功させても不思議ではなかった。³⁵⁾」[Giustiziano が取り組んだすばらしい事業の中で、この時期(529

年)の主要なものといえ、以前の皇帝や彼自身によってそのころまでに公示されていた法律で、承認と施行に値するものを、法典としてまとめ整理する事業だった。(中略、Diocleziano, Teodosio IIに前例あり。)しかし、Giustizianoは、あらゆる方面で自分の名前の栄光を詰めたいと熱望していたので、先人たちの権威を廃し、あらゆる判決とローマ帝国の統治にそれを利用するように規定することによって、新しい法典、すなわちGiustizianoの法典とよばれるものを作製させた。³⁶⁾「Jacopo Gotofredo およびその他の博識な法学者たちが行った考察は、たしかに真実である。つまり今日我々が有しているような法典を我々に与えるために、Giustizianoがその労作を主に利用したTribonianoは、それ以前の皇帝たちの法律を抹消したり、削除したり、変更したり、好きなように歪曲したりすることに関して、極度の自由を得ていたということである。しかもさらにその後、写字生たちが他の多くの誤りや欠点をその法典に付け加えた。Suidaは、Tribonianoが異教の偉大な法学者で、キリスト教徒の敵で、おべっか使いで、正義を金で売るほど、並外れて利害にうろさかったと書き残した。またProcopioは、彼が毎日古い法を廃して新しい法をでっち上げたと言っている。³⁷⁾」(紙数の都合で多くの戦いについては省略、563年には、反帝陰謀事件がおこり、名将Belisarioも連座)「そこで皇帝は彼に対して大いに憤慨し、彼の身内の者を全員投獄させ、彼の牢獄代りにその家をきびしく監視し、地位や権威をすべて停止もしくは剥奪した。続く何世紀かの内に、民衆の物語に尾ひれがつき、Giustizianoはこの偉大な將軍の目をえぐり、全財産を取り上げたので、彼は乞食となって食物を乞うて回ったと伝えた。³⁸⁾」(Baronioはそれを真実だとし、法王Silverioを追放した天罰だとするが)「私が何度も述べた通り、神慮はこの世では必ずしも人間の功績や不正に応じて幸福や不幸を分配するわけではなく、また常に天網がもたらぬ訳でもない。神は別の国を持っていて、そこで収支の帳尻を合わせるのだ。³⁹⁾」(皇帝は255年に83才で没した。)[彼は法学教授の間に彼が公けにした本を残し、歴史がその偉大な事業を語り続ける限り消えない記憶を、自分の後に残した。彼の内には多くの徳が結びついてしたが、様々な悪徳や欠点はそれに匹敵し、むしろ上回った。それは、彼の生前その臣下を悩ましたが、特に宗教問題に関する行き過ぎと、税負担や、人民に対してなされ、昔の著者も隠さなかった信じがたい強奪によるものだった。⁴⁰⁾」(そこでProcopioによって「怪物」「魔術師」「悪魔の息子」などと呼ばれたことも付言する⁴¹⁾。)

(6) Totila (Ildibado王の甥の)「TotilaはTrivigiの知事で、若かったが、壮大な気宇と少なからぬ分別のある人物だった。⁴²⁾」「Eraricoがゴート人に殺されると、真に命令するにふさわしいTotilaが王の地位に取って代った。⁴³⁾」それからTotilaはCumaの城を奪ったが、そこで大量のお金と何人かのローマの元老院議員たちの妻を見出した。だが彼女らは夫のもとに丁重に返還された。この行為でTotilaは、賢明で親切な君主の名を獲ちえた。⁴⁴⁾「これと同じころ、一人のカラブリア人がTotilaの許に出頭して、彼の守備兵の一人が未婚の娘を犯したと訴えた。Totilaは犯行を認めた犯人を投獄させた。その男が大変な勇士であることを知っていたゴート族の首領たちは、その死を望まず、Totilaを訪ねて許しを乞うた。するとTotilaは巧みな弁説で、もしそんな罪を許すと、全民族に神の怒りを招くということを理解させた。(中略)彼は犯罪者を処刑して、その全財産を娘に

贈った。⁴⁵⁾」(ギリシア人の著者 Procopio がこうした記録をして、東ローマ軍の貪欲と好色に、ゴート軍の厳正な規律を対比させ、イタリア人がゴート族の治世をなつかしんだと証言する⁴⁶⁾。152年にいよいよ Narsete 軍と Tagina で決戦を挑むが)「Totila は弁解の余地のない無分別の汚点を残した。というのは、格闘も弓矢や剣の利用も許さず、もっぱら長短いずれかの槍で戦うことを自軍に命じたからである。それに反して Narsete 軍は、あらゆる武器を採用し、ゴート軍に大被害を与えたので、ついに相手を打ち負かし敗走させた。約6千人のゴート兵が戦場で死に、残りは降伏したが、間もなくギリシア兵に斬り刻まれた。(中略)兵士と同様勇敢に戦っている時、戦闘の興奮の中で矢に射られたためか、それとも逃走中に Asbado というジェピグ人によって投げ槍で背を刺されたため(それが何者かは不明だが)、カブラという土地につくと、怪我の手当をしてもらったが、その後間もなく死に、遺体はあわただしく埋められた。種属こそ蛮族ではあったが、古代の英雄の間に名を記録される価値がある。行動における勇氣、統治における知恵、国家が倒れんとする際の活躍ぶりは大したもの、彼が解体寸前に見出した国家は、彼の世話によってかなり良い状態に立直ったほどである。⁴⁷⁾」

紙数の都合で以上にとどめるが、これだけの記述でも M. の評価はかなり分る筈だ。Bevilacquaによると Teoderico の評価は(1)全面肯定(2)全面否定(3)晩年のみ否定で他は肯定にと分れるとされている⁴⁸⁾が、M. はかなり(1)に近い(3)だといえよう。M. は Totila をも英雄視し、Bertelli の指摘⁴⁹⁾する通りゴート族に対しては好意的である。それとは逆に、Clodoveo に代表されるフランク族には嫌悪を抱いており、その王族の血で血を洗う相続権争いを批判し、「この民族は当時約束を守るとはどういうことか知らなかった⁵⁰⁾」とか、迷信を残していると非難している。あの高名な東ローマ皇帝 Giustiniano に対しても、M. は決して好意的ではない。この時代はその威風によって本国は平和を楽しんだかに思いがすが、ペルシア軍に侵略されたり、北方の蛮族に脅かされた時代で、決して平和ではなかったとする。ヴァンダル族をアフリカで破った場合と異なり、イタリアでのゴート族相手の戦いは、時間がかかり、一時は危機的状況に陥っていた。さらに彼の行った法典作製の事業にしても、M. はかなり辛辣なコメントを加えている。むしろおじの無学な Giustino に対しての方がはるかに好意的である。東ゴート族支配の時代は『イタリア年代記』中では短い部分であるが、M. の評価や好悪に関しては、かなりはっきりした手掛りが得られる部分だといえるであろう。また帝政末期に多少だれた感じも生じていた記述が、この時代で生氣を取り戻しているような印象が私には強く感じられるのである。こうして『年代記』中で評価の高いロンゴバルド族の時代記述への基礎が築かれつつあった、といえるのではなかろうか。

[注]

第一章

1) Sergio Bertelli, *Erudizione e storia* in Ludovico Antonio Muratori, Napoli 1960, pp. 431-2.

2) L. A. Muratori, *Annali d' Italia* の539年の項、本稿で利用している Venezia, 1790年版では、第八巻(Opere

del Muratori Tomo XXIII, Annali d' Italia, Tomo VIII) 中の106ページ所収, 以下の記述では, Vol. VIII, p. 106 と記す。

- 3) Dal Muratori al Cesarotti, Tomo I, Opere di Lodovico Antonio Muratori, A. cura di Giorgio Falco e Fiorenzo Forti, Vol. II, pp. 1131-1145. なお収録事項は i) Teoderico 王政の開始, ii) Teoderico と gepidi 族の傭兵, Clodoveo の死, iii) Teoderico の文明的統治, iv) Teoderico の悲劇, v) フランク王 Teodeberto の北イタリアへの遠征, vi) ナポリ占領と Totila の寛大, vii) ゴート族の讃美, viii) Belisario と反 Giustiziano 陰謀の8項目である。
- 4) 注2の op. cit., Vol. VII, p.230.
- 5) id., p. 301.
- 6) Vol. VIII, p. 250.
- 7) id., p. 34.
- 8) id., pp. 34-5.
- 9) id., pp. 69-70.
- 10) id., p. 72.
- 11) id., p. 185.
- 12) id., pp. 20-1.
- 13) たとえば, Luigi Salvatorelli, Sommario della storia d' Italia, Torino 1955 の capitolo III, Ostrogoti e Bizantini (約23ページ) 中2ページ (pp. 86-8) が Benedetto di Norcia とその影響についてあてられ, また Gabriele Pepe, Il medioevo barbarico d' Italia, Torino 1963 では, ゴート族支配の時代を扱った Cap. I L'età di Odoacre e dei goti (97ページ, pp. 9-105) 中13ページ余 (pp. 92-105) が Benedetto di Norcia にあてられている。M. としては, 法王庁やキリスト教会に関連した記事は, 修道会運動も含めて, 大部分 Baronio の作品に譲り, 必要最少限度に止めるつもりだったようである。
- 14) 注2の op. cit., Vol. VIII, pp. 49-50.
- 15) id., p. 183.

第二章

- 1) id., Vol. VII, p. 279.
- 2) id., p. 230.
- 3) id., p. 323.
- 4) id., p. 330.
- 5) id., p. 335.
- 6) id., p. 341.
- 7) id., p. 376.
- 8) 引用の手紙は id., p. 377. なお Cassiodorio の手紙に含まれた決闘批判は, Borgogni 族の王 Gundobaldo が 501年に発布した法に含まれた決闘 (duelli) の許可 (id., pp. 361-2) に対する批判である。
- 9) id., p. 387.
- 10) id., pp. 400-2.
- 11) id., p. 415.
- 12) id., pp. 425-6.
- 13) id., pp. 439-40.
- 14) id., pp. 440-1.
- 15) id., Vol. VIII, p. 13.
- 16) id., p. 14.
- 17) id., p. 25.
- 18) id., Vol. VII, p. 343-4.
- 19) id., p. 415.

- 20) id., pp. 414–5.
- 21) id., p. 423.
- 22) id., p. 445.
- 23) id., pp. 446–7.
- 24) id., pp. 447–8.
- 25) id., Vol. VIII, p. 36.
- 26) id., Vol. VII, p. 455.
- 27) id., p. 455–6.
- 28) id., p. 456.
- 29) id.,
- 30) id., Vol. VIII, pp. 14–5.
- 31) id., p. 36.
- 32) id., p. 37.
- 33) id.
- 34) id.
- 35) id., p. 39.
- 36) id., pp. 44–5.
- 37) id., p. 45–6.
- 38) id., p. 247–8.
- 39) id., pp. 248–9.
- 40) id., p. 255.
- 41) id., p. 256.
- 42) id., p. 126.
- 43) id., p. 127.
- 44) id., p. 141.
- 45) id., pp. 136–7.
- 46) id., p. 137.
- 47) id., pp. 197–8.
- 48) AA.VV., L. A. Muratori Storiografo, Firenze 1975 所収, Alessandro Bevilacqua, L. A. Muratori e l'arte gotica (pp. 151–89) の p. 152 の指摘。なおこの論文は、フィレンツェを中心とする芸術—文学の流れによって不当に無視されていた、ラヴェンナ中心の芸術—文学の再評価における M. の役割を論究したもの。
- 49) 注 1 の p. 433 および、同書で《Le Antichità Estensi》を扱った Cap. III の pp. 251–4.
- 50) 注 2 の Vol. VIII, p. 109.

ノート 3 終